

人間環境デザイン学科開設時の思い出とお世話になった皆さんへ

高橋 儀平

2006年4月人間環境デザイン学科の設立とともに工学部建築学科からライフデザイン学部へ異動し、この3月で13年となった。この間、東洋大学や学部だけではなく国内外の社会情勢も教育環境も大きく変化し、多様な価値観が一挙に押し寄せた感がある。思い起こすと2003年12月の工学部教授会に朝霞キャンパス新学部設置構想が伝えられた。教授会の直前、内田雄造工学部長からも新学部設置の話を聞いていた。年が明けライフデザイン学部初代学部長となる古川孝順先生が川越のキャンパスを訪ねてこられた。6月に設置認可申請を出すために急ピッチで準備しているという。ユニバーサルデザインに関係する新学科設置の正式なお誘いであった。実はその2年ほど前に工学部で新学科構想の動きがあり、ユニバーサルデザイン学科を候補の一つとして提案した経緯がある。残念ながらその時はプレゼンコンペに敗けて新学科設立には至らなかった。その情報が流れていたのかもしれない。まあお誘いというより、決断要請であったともいえる。正直私が躊躇したのは経験のない学部異動ということへの心の準備が一番大きかった。異動するにしてもしなくてもとも6月の文科省申請までの準備は無理ですと答え、古川先生には決断を1年延ばして欲しいと伝えた。その後事態は急速に進み、後に同僚となる学内外の数名の人たちとも出会い、漸く要請に応える意思を固めたのが3月の卒業式前後であった。

古川先生には渋い顔をされたが「待つ」ということになり、2005年5月頃からは新学科に賛同してくれた教員候補の人たちと1か月に一度の任意の教室会議をセットし、本格的な人事構想、アカデミックプランを固めていった。分野が建築、プロダクト、福祉工学という3専門領域にまたがるという全国でも初めての試みであり、準備に集まった教員候補の人たちは、本当に開設できるのかという不安の方が大きかったのではないかと想像する。私自身はとにかく教員候補を集めて前に進めなければならなかった。「不安」に応えられる余裕など全くなかったというのが本音である。その一方で、厳しい期間内で施設改修や備品調達を担った祥士先生には本当に助けられた。私は施設のバリアフリー改修について徹底して法人にお願いした。各階に車いす使用者用のトイレの設置、エレベーターの新設3基、しかも大きさは国の基準を上回る15人乗りを、各教室の教壇には車いすで上がれるようにスロープの設置等を要請した。法人には国のバリアフリー基準をつくる私が恥ずかしくないようにして欲しいと何度もお願いしたのだが、ほぼ要望のすべてを受け入れてくれた。全国の既存の大学の校舎でここまでバリアフリー改修を行った例はないと思う。こうしたことから、やはり立ち上げのための準備期間は少なくとも2年はしっかりと持つことが大切であるという認識を十分に確認できた。

2006年4月第1期生を迎えた。前年9月に文科省の教員審査が終わり、設置認可は11月末だったように思う。それから突貫入試を行い、結果1月末の推薦入試で45名、2月の一般入試（A入試）で128名、3月入試で9名、計182名と順調に滑り出すことができた。翌年度は入試策定に失敗し228名の新生を抱えた。授業運営は毎回大変ではあったが、むしろ面白く賑やかな学年であったように思う。設置準備段階から始まり、初年度から数年間は事務課との交渉事が山のようにあり、その度ごと

に古川学部長をはじめ事務部長、職員の皆さんを煩わせた。毎年のように備品や施設整備の要望を繰返した。特にデザイン授業に関わる授業準備、施設設備は職員の方の経験も少なく、事務課の皆さんは判断に困られたのではないかと。初期にご迷惑をおかけした懐かしい職員の方々は、今は朝霞にはいない。止むを得ず法人当局との直接交渉も頻度が多くなった。当時の法人側には田渕常務と關常務という強烈な個性人がいて、学部長時代に同行していただいた事務部長にはご迷惑を掛け続けた。しかし乍ら難題は一向に減らないものの、学科内各教員のチームワークはより強化され、入試や授業運営、北京理工大学などとの国際交流の進展が徐々に拡大していった。私にとっては先に退職された天沼教授、米田教授との教室定会議での掛け合い漫才が楽しい思い出として残っている。歴代の学科主任、学科長、教員の皆さんに改めて深く感謝申し上げたい。

さて、ライフデザイン学部はこの後どうなるのか。全国的にも稀有な存在であった健康、スポーツ、福祉、こども、高齢者、障害者、そして住まいや街の環境領域を包括的に学ぶ学部がなくなるのはとても残念である。年齢、性別、心身の状況を問わず、あらゆるシーンで公平性が貫かれる生活環境づくりが本学部の設置理念である。ライフデザイン学とは、結局は「生き方」を学ぶデザイン＝「方法」「プロセス」の獲得である。学部にも僅かではあるがその連携があり、試行錯誤があった。実は私も当初はライフデザイン学部の名称には馴染めなかった。しかし振り返ってみると、今東洋大学で求められている教育や研究の連携はこのライフデザイン学部から始まったのではないかとさえ思う。

流行語大賞にはならなかったが、「ライフデザイン」は私たちが作った造語である。自信をもって、「生き方」を学ぶ「デザイン」を今後も追及して欲しい。新学部には歴史を元に戻すのではなく何としても「Innovation, Diversity & Inclusion」を包含する次の一手を期待したい。赤羽キャンパスへの移転判断が間違いでなかったことを祈りたい。

東洋大学に奉職して実に47年になる。学生時代を含めると半世紀以上の長きに渡り東洋大学でお世話になったことになる。でも不思議に自分では長さを感じない。おやじギャクは相変わらず地を這っている。健康も何とか維持できた。お世話になったすべての東洋大学学生、教職員の皆さまのお陰である。大学は離れますが、皆さまの益々のご発展を心よりご祈念申し上げます。本当にありがとうございました。



2期生ガイダンス、懐かしい先生方と（2007年）



福島震災復興ゼミ・大熊町（2017年6月）